

調	査
報	告

架橋離島と小規模離島のいま⑤

唐津市の島々

本誌編集集部

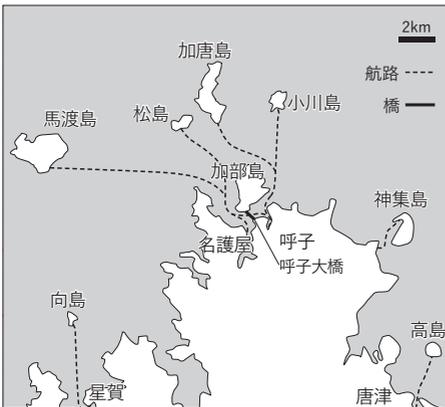
佐賀県唐津市は、平成一七年の町村合併により成立した。東松浦半島を取り囲むように、七つの有人離島（高島、神集島、小川島、加唐島、松島、馬渡島、向島）と対本土架橋により平成三年に法定解除された加部島が所在している。本稿では旧呼子町域に所在する加部島（令和二年国調人口四五八人）を中心に、同域の小川島（二六三人）、旧肥前町域の向島（五〇人）の現況を報告する。

加部島——唐津市唯一の架橋島

加部島と本土を結ぶ呼子大橋（全長七二八メートル）は、平成元年四月に開通した。農業の生産性の向上及び農産物流通の合理化を図ることを目的に建設

されたことが特徴で、本土からの農業用水パイプラインが共架されている。加部島出身で呼子公民館長を務める大園勇次郎氏は「橋で繋がったことによって、本土にも通勤できるようになった。また、島に嫁ぐことへのハードルも下がったと思う」と架橋効果につ

昭和二九年	第四次指定により馬渡島・小川島が法定離島に
昭和三二年	第六・七次指定により加唐島・松島・高島・神集島、加部島、向島が法定離島に
昭和五五年	呼子町からの委託で九州経済調査協会が加部島架橋経済調査を実施
昭和五八年〜平成元年	呼子大橋を建設
平成三年	第一三次指定解除により加部島が法定離島から外れる



いて語った。しかしながら、旧呼子町全体で少子・高齢化が進み、加部島も例外でないという。令和六年一月末現在の加部島の高齢化率は四三・九パーセントで、唐津市全体（三三・七パーセント）より高

い。子どもの減少にともない加部島小学校は平成二三年に本土側の呼子中学校に統合されている。加部島中学校は架橋前の昭和六〇年に呼子中学校に統合（平成二五年には呼子中も旧鎮西町の打上中、名護屋中と統合し海青中学校となった）されており、現在、島に住む小中学生はスクールバスで通学している。

特産品となった甘夏栽培

山口初・めぐみ夫妻は、架橋以前から加部島で甘夏の有機肥料栽培に取り組んでいる（本誌二五六号参照）。初氏は「加部島は昔から水が貴重な島。そのため、農業を発展させるには配水管整備が重要だった。架橋に合わせて農業用水用パイプラインが整備されたことで、イチゴのハウス栽培やタマネギ栽培などに取り組む人が出てきた」と当時を振り返る。

架橋後、規格外のため廃棄される甘

夏を利活用するべく、めぐみさんの手で甘夏ゼリーの加工販売も手掛けるようになり、平成二年に「甘夏かあちゃん」を創業。一月から六月にかけて甘夏を収穫し、冷蔵庫で保管した後、ゼリーに加工している。生産量は現在、年間で生果四〇トン、ゼリー三〇トンほ



「甘夏かあちゃん」の甘夏ゼリー。

ど。商品は、道の駅をはじめ唐津市内各所で販売されており、めぐみさんや息子の恵市さんが自動車で配送している。東京の高級ホテルなど、全国各地からの発注も多い。また、「甘夏かあちゃん」では、関西など県外からの修学旅行生の農業体験の受け入れも行なっている。修学旅行生は、マイクロバスで来島し、収穫やゼリー作りなどを体験できる。

島外からの人材・企業による 水産・商業の活性化

架橋により常時交通が確保された加部島では、島外の企業・移住者による新たな動きもみられ始めている。令和三年、唐津市を中心に養殖業を展開する企業が、加部島でアジなどの養殖業を営んでいた水産会社を買収・合併する形で（株）ヤママルサカを設立した。呼子大橋の下、加部島と本土間の



呼子大橋の外観。



唐津Qサバの養殖生け簀で、その特性を説明する出口養殖場長。

海峡には、同社の養殖生け簀が設置されている。

現在、生け簀は最大六六台。三八台が稼働し、唐津Qサバ（後述）一〇万尾、クエ二万尾、シマアジ三万五千尾、トラウトサーモン（玄海サーモン）二万尾を養殖している。このうちこの養殖施設の主力は、「唐津Qサバ」と呼ばれる

ブランドサバである。市と九州大学が共同研究で養殖の手法を開発したことから、同大学の頭文字や Quality など複数の意味を込めて名付けられた。

唐津Qサバの特徴は、卵から魚を育て、育成した魚から採卵を行なう完全養殖である点だ。天然魚を採捕して大きく育てる従来の養殖法と異なり、一貫して人が管理したエサを与えることができるため、アニサキスの寄生を防ぐことができる。ヤマフマルサカ産のサバを親魚として、本土の唐津市水産業活性化支援センターで生産された稚魚を島に運び入れ、体重四〇〇グラムまで育てて出荷している。出荷時期は真夏と真冬を避け一〇月〜六月頃（令和四年度の赤潮の影響を受けたため、同五年度は六年三月以降に出荷予定）。佐賀玄海漁協の魚市場に加え、漁協を通して同社の取引先に卸している。主な利用者は、市内飲食店や宿泊業者で、味はもちろん、安心して生食でき、安定供給が可

能なことから、イカに次ぐ呼子の新たな特産品となりつつある。

現在、同社の従業員は七名。うち二人は加部島に住み、残り五人は市内本土から通勤している。早朝からの作業もあるため、船に左右されずに出勤できる点が架橋のメリットである。さらに人工飼料の移入や、活魚運搬車による出荷などの面でも、常時交通が確保されている利点は大きい。「加部島周辺は潮通しが良いため、水温などの面で魚体の成長に良い。二〇万尾の出荷を目指して、今後は生け簀を増やしていく予定」と、養殖場長の出口孝陽氏は展望を語った。

呼子大橋が窓から見える見晴らしの良い古民家を改装した住居兼店舗で、自家焙煎のコーヒーと唐津市産の牛乳を使ったソフトクリームなどを提供しているのは「喫茶ネルヤ」だ。令和五年十一月、加部島で開業。店主の田畑貴広氏は福岡県出身で、佐賀県が舞台

として登場するアニメ『ゾンビランドサガ』を機に佐賀県内を巡るようになり、数年前に加部島に移住。喫茶店の開業以前は島から隣町の玄海町の介護施設に通勤していたという。

開店して間もないが、島の数少ない喫茶店として、地域の人にも利用され始めている。このほか、趣味の写真撮影の経験を活かして、観光客に「杉ノ原放牧場」などのフォトスポットを案内することもある。「加部島は車で回るのが良い島ですが、道が分かりづらいところがネック。このほか、月に一〜二回程度SNSで参加者を募集し、店内でプラモデルを組み立てるイベントも企画している。地元・観光・趣味のつながりを大事にしていきたい」と田畑氏は話す。

小川島——水産業で栄える島

呼子港から定期船で二〇分。小川島

は、江戸時代から昭和三十年代まで捕鯨で栄え、島内にはかつての鯨見張所や鯨供養の塔が残る。

現在も主要産業は漁業で、特に六月から九月にかけてのヤリイカ（ケンサキイカ）漁が盛んである。港に瞬間冷凍設備を備えており、新鮮なイカを墨袋を取り除いた後すぐに凍らせ、真空パック詰めする「宝凍イカ」が島を代表する商品だ。しかし近年、その漁獲量は減少。従来は、冬季もお歳暮用などとして冷凍貯蔵した在庫から販売していたが、現在はふるさと納税の返礼品の発送に限っている。

イカに加えて、アラ（クエ）の一本釣り操業されているが、獲れるサイズが年々小さくなっている。小川島区長の渡辺保晴氏によると「九月から三月にかけて、島を出て出稼ぎに出る人が増えている」という。さらに島ではムラサキウニやガンガゼの異常繁殖による磯焼けも深刻で、海藻の胞子植え付

け（スポアバッグ法 など）に取り組み、藻場の回復を図っている。

少人数ならではの学校教育

唐津市および有人各島の住民が平成二六年に設立した「からつ七つの島活性化協議会」は、同二九年度より、「宝さがし留学」と称して、小中学生を対象とした離島留学を実施している。開始当初は馬渡島と加唐島の二島だけであつたが、実施校を増やし、令和五年度は、唐津市の離島で開校しているすべての学校で留学生を受け入れている。小川小中学校では、全校生徒一三名（小学生九名、中学生四名）のうち小学二年生と六年生の二人が留学生となっている。小川島の留学形式は、保護者も島で暮らす家族留学を採用している。

小川小中学校の特色は、地域に根差した教育活動である。磯での実習を通じてウニ漁を学ぶ「がぜとり体験」や、

かつて鯨の解体の際に歌われた労働歌「鯨骨切り唄」を体育大会などで住民に披露するなど、児童・生徒たちが島の産業や文化に触れる機会を随所に設けている。なお、鯨骨切り唄は島内有志で「子供保存会」をつくり、普段から地域住民が指導者として練習などに携わることで、継承を図っており、その成果を島内外のイベントなどで披露している。

伊東泰弘校長の案内で、授業風景を見学させていただいた。クラスは複式学級でも、授業は学年ごとに行なわれるため、ほぼマンツーマンでの授業となる。子どもたち一人一人に合わせたきめ細かな指導ができるのは大きな強みと言える。

また、表現力やコミュニケーション力を養うため、児童・生徒が当番制で発表を行なう「スピーチタイム」を小中学校で三〇年も続けている。基本的には小学校・中学校単位だが、小中合



ふるさと納税の返礼品の「宝凍イカ」。

同や加唐島の加唐小学校など他校と一緒に実施することもある。さらに中学校では月に一回、馬渡中学校の生徒とウェブ会議システムを活用して、新聞などで気になったニュースを紹介し合っているという。

向島

——海士漁が営まれる小規模離島

向島は東松浦半島西方に位置し、本



小川中学校での美術授業の様子。写真の川野芽依さんは佐賀県学童美術展などに複数回入賞している。

土の星^{ほしか}賀港から定期船で一〇分。唐津市の離島の中では、松島（四五人、令和二年国調）に次ぐ小規模な島である。向島区長の小山義久氏によると、島

内に商店は無く、住民は一週間に一回程度、定期船で本土へ買い物に行く。高齢者の場合、本土側に住む子どもが送迎していることが多いという。

島の主要産業は、海上による採貝藻漁業だ。アワビ、サザエ、ウニ（アカウニ、ムラサキウニ）を漁獲し、長崎の志岐島から買い付けに来る仲買人に出荷している。小川島と同様に、向島でも磯焼け被害は深刻で、特に中身の詰まったウニが採れなくなっている。現在、一二月から三月にかけては、サワラの引き縄釣り漁も実施している。島には入野小学校向島分校があるが、現在休校中。ただ、島内に

未就学児が一人いるため、再来年度には再開する予定だ。医療面では、常勤の医師・看護師はおらず、月に二回、市民病院の医師が訪問診療している。歯医者も年に四回来島し、歯石除去などを行なっている。島内にヘリポートはあるが、夜間や早朝の緊急搬送は実施していないため、急患が出た際は家族や親族の漁船で星賀港まで運び、そこから救急車で搬送しているという。

多様な役割を担う介護施設

集落中心部に位置する「サテライト向島」は、令和三年四月に開設された向島初の小規模多機能施設だ。サテライトの名が示す通り、唐津市本土の小規模多機能施設「ひだまりしいの木」の分所という位置づけで、本土側と同じ料金でショートステイ、デイサービス、訪問介護、配食などのサービスを提供している。もっとも重い要介護度

五も対応可能で、従業員は七名（うち島在住四名）体制で運営している。

同施設を含め市内で複数の介護施設を経営する坂本スジ子さんは、向島出身。島外で介護事業に携わる中で、島の高齢者が介護サービスを受けられて



サテライト向島の館内の様子。

いないことに気づき、両親を島外で看取ったことを機に、向島に介護施設を作ることを決意したという。

「以前、向島には自力でお風呂に入ることができず、何年も入浴できていない人さえいた。島に住むお年寄りも、最



サテライト向島自慢の島産アジフライ。

期まで故郷で過ごしたいという想いは同じ。介護施設に入るために島を離れた父の涙が今でも忘れられない」

坂本さんは数年かけて島に足繁く通い、ボランティア活動や整体師を招くなど住民との信頼関係を築きながら、実家の跡地に施設を建てた。なお、島にサテライト型事業所を設置するにあたっては、本体との距離・時間などの面でハードルがあり、唐津市との調整に三年かかったという【※】。施設ができたことで、島内で介護サービスを受けられるようになっただけでなく、島の施設から島に戻った方もいる。利用者の家族からも「施設があることで、島を離れている時も安心できる」と好評だ。「島で一日でも長く健康でいてほしい」と坂本さんは話す。なお、現在も月に二回島に整体師を招いている。

同施設の機能は幅が広く、例えば、雷や大雨の際に利用者をはじめ住民の避難場所となっていたり、当直を一人置

いて夜間の急な体調不良にも対応可能とするなど、時に介護の枠を超えた役割を担っている。さらに、喫茶としてコーヒーや予約制でワカメの佃煮やアジフライなど島の食材を使った昼食を提供するなど、交流拠点としての役目も果たしている。飲食サービスは、来島者も利用可能だ。「両親がかつて島で休憩所を営んでいて、宿泊場所や飲食を提供するなど、人の役に立つことなら何でもやっていた。それを見習って取り組んでいる。利益だけを考えるとできない」と、坂本さんは笑う。

○ 以上、唐津市の三島の現況を見てきた。加部島では山口夫妻やヤマフマルサカの事業のように地域資源を活かした特産品の開発・販売に取り組みられているとともに、喫茶ネルヤの田畑氏のような新規移住者の獲得や島内外の方々との交流の促進など、架橋のブラスの効果を感じることができた。

一方、現在市では「からつ七つの島活性化協議会」や佐賀県の地域おこし協力隊の活動として、離島振興法に指定されている有人七島が丸となった活性化に取り組んでいるが、加部島は法指定外であるためその活動に含まれないことが多い。島をPRする催事や島同士の交流イベントなどに、加部島も有人七島とともに「玄海諸島」として、一緒に参加することができれば、双方にとって刺激になるのではないだろうか。

小川小中学校では、少人数ながらICTを活用することで対外経験の確保に努めている。離島の小規模校における不利な点を克服できれば、マンツーマン授業のような島の学校の特徴は、大きな長所にもなり得る。なお、本稿では取り上げなかったが、神集島を中心にドローンを活用して災害時の物資輸送やイノシシ対策などの実証試験が行なわれており（国交省スマートアイラン

ド事業、小川島をはじめ他の島でも体験会が実施されている。

最後に向島では、サテライト向島の存在が住民の健康福祉の向上に直結している。小山区長をはじめ島に住む方々も、「施設ができて安心した」と語っていた。しかしながら、同施設が手厚いサービスを島で実施できているのは、坂本社長の故郷にかける想いに依るところが大きいように感じる。全国の離島においても、住民が安心して生活できる介護施設をはじめ介護態勢の充実が、常に求められている。向島の実践事例を水平展開できるように、離島におけるサテライト型事業所の設置要件の緩和措置をはじめ、介護士の確保などについて、国のさらなる支援が必要ではないだろうか。（石川）

※・小規模多機能施設における本体事業所とサテライト型事業所との距離について、厚生労働省の基準では、自動車などでの移動に要する時間がおおむね二〇分未満とされている。